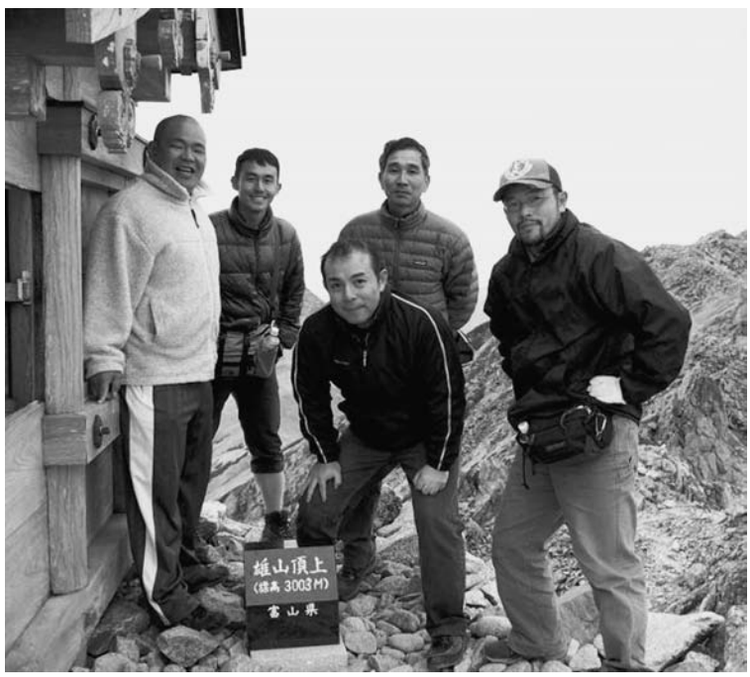
富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第 28 号
（2012年3月26日発行）



内地留学研修（立山登山・９月）

センターニュース第28号　目次

０２	巻頭言	ザイルをつなぐ	学部長	北村潔和
０３	挨拶	教員養成の改革と実践総合センターの役割	センター長	小川　亮
０４	寄稿	「読書好きを育てる読書ノート指導」を考えました	客員教授	本多信昭
０５	寄稿	“けん玉復興ツアー”に参加して	客員教授	寺西康雄
０６	学園通信	附属学校園から（附属幼稚園・附属小学校）		
０７	学園通信	附属学校園から（附属中学校・附属特別支援学校）		
０８	報告	第 15 回発達と臨床の心理学講座		
０９	報告	第 16 回発達と臨床の心理学講座		
１０	報告	Visual Triathlon 2011		
１１	報告	センター協議会報告・北陸地区会議報告		
１２	報告	センターの相談件数・編集後記		

巻頭言

ザイルをつなぐ

人間発達科学部　学部長　北村　潔和

学生時代は山登りに興じていた。大学に山岳部を創設したぐらい一生懸命に山を登っていた。最初は、重い荷物を背負い、一般道を辿って頂を目指していた。特に独立峰が好きで、大雪山、大山などを登った。しかし、山を登れば登るほどに、人がつけた足跡を辿りながらの山行きに、違和感を持つようになってきた。人の足跡のない山が身近にあるはずがなく、どんな山行きをすることで満足できるかを考えていた。

京都の登山専門店に入り浸っていたのもそのころで、その店の常連客から岩登りに行こうと誘われた。名前も知らない人とザイルをつないでの岩登りである。京都山系の中にも高さ20mから30m程度の岩が、本番の大きな岸壁を登る練習場のように登られていた。岩登りの技術は、山を安全に登るための基本的なものと考えて以前に何度か経験があった。ザイルをつないで、トップを交替しながら登っていった。技術を駆使しての岩登りは、達成感があり楽しかった。技術が高まってくると、人の登っていない岩が近くにないかと探し回ったのもこのころだ。

京都の古書店で古い山のガイドブックを探し出して読んでいると、「1000m程度の山にも小さな渓谷があり、そこには想像を絶するような滝がある」との沢登りへの誘いが紙面を埋めていた。そこには、「滝は一度登られても、その人の足跡はその後から消されていき、いつも自分がルートを切り開いている気分がある」と書かれていた。この文章に惹かれて、京都府や滋賀県にある沢を仲間と登った。橋の下で一泊し、わらじを履いて登った。確かに小さな沢でも25mから30m程度の滝が数多くあった。暖かい季節を選んで、沢登りを慣行したが、水に打たれる手はかじかみ、取り付いてすぐに滝つぼに落下したことなどの大変な思いがある。しかし、ルートを自分で切り開いて登っている実感があって満足した。

わらじを履いても滑りやすいので、ザイルをつないで登るのが常だった。登る途中にハーケンを打ちそれにザイルを掛けて、滑って墜落したとしてもそこを支点に体が支えられる。しかし、多くの場合はハーケンを打たずに、ただ仲間とザイルをつないで登ることが多かった。沢を登り詰めると藪をこいで稜線にたどり着くといった繰り返しであった。

あるとき、この滝はザイルをつながなくとも登れるのではと思い、ザイルなしで登り始めた。それが、後一歩で滝の落ち口に出るといったところまで登ったが、最後の一歩が出なくてリュックサックからザイルを出して、ハーケンを打ってザイルを掛けて降りてきたことを思い出す。不思議なことに、ザイルが脚の間を通って、ただ仲間とつながっているだけで安心感があり、心の不安が消え、一歩を踏み出す勇気をもらえることを実感したのがこのときだった。

震災後は、人とのつながりが一歩を踏み出す勇気をあたえ、大きな力になることが話されてきている。今考えると、無駄かなと思ってつながっていたザイルに、本当は自分の行動に安心感と勇気をもらっていたと感じる。このセンターの役割の一つが、このザイルのようになればと期待している。私としては、登っている人のザイルを下で支える人になれればと考えている。

挨　拶

教員養成の改革と実践総合センターの役割

センター長　小川　　亮

昨年、富山大学に異動してから10年が経ち、通算で勤続20年の表彰をいただいた。国立大学（上越教育大学）の赴任したのが平成元年11月だったので、実際には国立大学教員になってから23年間の月日が経過したことになる。勤続20年の表彰を受けたからといって、何かが変わるわけでもないが、一つの節目には違いない。

この23年間、学校教育研究センター（上越）、教育実践総合センター（富山）、人間発達科学研究実践総合センター（富山）と、ずっと実践センターに在籍していたので、実践センターの全国組織であるセンター協議会（正式には国立大学法人教育実践研究関連センター協議会）のメンバーの中でも古株の部類に入るようになってしまった。そんな経験の中で、実践センターの持つ役割について気がついた事を書くことにする。

元来、実践センターの役割は、教員養成系大学／学部の持つ安定性（保守性）に対して、地域や時代の要請に答える形で、変化に対応する柔軟性を提供するところにある。もちろん、「新構想教育大学」として設置された、兵庫、鳴門、上越の３つの教育大学も、変化に対応するために作られたのであるが、これらの大学は教員養成に対する政策的な必要性から設置されたこともあり、保守性という意味では、むしろより保守性の高い内容になっていた。それに対して、実践センターは「教育工学センター」に始まり、教育実践、教育臨床と、常にその時々の教育的課題に対応する目的で部門が増えてきたという経緯から、変化に対応する機能を果たしてきた。

現在の富山大学人間発達科学部は、教育学部から教育人材を育成する一般学部に移行した。教員養成の学部ではないが、教育人材を育成することを目的とした学部になった。この学部改組に対して、実践センターにおいても名称が変更されたが、内容的には全く手つかずの形で温存された。センター側としては、小学校教員養成の本体を実践センターに取り込んで、20人体制のセンターを作るなど、いくつかの選択肢を提示したが、学部のシステムを固めるためには、現状のままで運用することが望ましいと判断された結果、現状維持となった。

全国的な流れとしては、教育臨床のスタッフを臨床心理士養成の大学院のスタッフとして所属変更する大学が多く見られ、学校における臨床心理的な対応能力を持った教員の養成については、学部・大学院の機能として対応するようになってきている。その点、富山大学では、県教委との連携により６ヶ月のカウンセリング指導員の育成プログラムがあり、毎年６名の研修生が実践センターで学ぶことで、対応している。実践センター全体の方向としては、教師の資質能力の向上を目指した教育実践研究への対応が真剣に求められているというのが、ここ数年の感触である。

今後の対応については、状況の変化をより慎重に見極めて行く必要があるが、４月から学習環境研究部門に新たなスタッフを迎えて、教育工学研究部門と力を合わせて、教育実践の研究推進に力を注ぐ必要があると考えている。来年度からは「子どもとのふれあい体験」「学級担任論」に加えて、「附属学校との共同研究プロジェクト」も実践センターのスタッフが中心になって対応する予定である。今後ますます、教員養成と教育実践研究に力を注いで行くことになるだろう。

寄　稿

読書ノート「いいとこ探し」活用で読書好きを育てよう

センター客員教授　本多　信昭

最近の子どもたちは読書をしなくなっている。それが起因となって文章読解力が不足し、ひいては学力不足につながっていると心配する声が多い。となると、子どもたちを読書好きにを育てることは重要な教育課題といえる。さて、子どもたちを読書離れさせる要因は、と考えると、まずテレビ、ゲーム等があげられる。“楽しい。集中する。みんなの話題である。”など、今では大人の入り込む余地はないくらいの世界である。そのような子どもたちであるが、次のような一面もある。「幼児は絵本やその読み聞かせが大好きである。小学校低学年・中学年では学級文庫が大好きである。」子どもたちは、本の中で新鮮かつ多様な世界に出会い、いろんな不思議を発見する。抽象的な文字の世界で表現された事象に思いを巡らし、空想の世界に浸る喜びを味わっている。本来は大好きな本なのに、どうしてこの楽しい読書から離れていってしまうのだろうか。

これまでの読書指導は、読みっぱなしではなく、心に残ったところについて自分の気持ちや考えを書くことを求める読書ノートや感想文形式での指導であった。読みっぱなしではいけないことは同感であるが、思いや考えを書くという要求はレベルが高すぎ、子どもたちに大きな抵抗感を抱かせる。私は、これが読書離れの原因ではないかと考えた。

そこで私が校長時代、朝の読書や学級文庫の活用に、次のような読書ノート指導を提案した。

内容は、読書日時、書名、作者名、読んだページ（○ｐ～△ｐ）、という定番項目と

(1)　一番好きなところ、初めて知ったことや心に残ったところ（**＝いいとこ**）を**探そう。**

(2)　その部分が書いてあるページと中心の文章を、**「 」や 、。もしっかりと書き写そう。**

この内容だから、ノート１ページを２等分したスペースがあれば十分だ。次の効用も考えられる。

①　本を書き写すだけならば**“考えの中味や、自分の気持ちを表現しなくてよい”**のだ。書き写すことで記述スタイルの基本を学ぶことができる。

②　目に見える**積み重ね**という効果がある。読書ノートが１冊２冊と増えていく喜びは**読書への意欲**を高めるであろう。

③　簡単な**対話により個の考えを深める**ことができる。小学校の学級文庫で同じ本を読んだ二人の子が違った箇所を抜き書きしていた。先生がクラス全体に「どの子の抜き書きが正解でしょう？」と問いかけたところ、「どっちもあってるよ。違ってないよ。」という返事が返ってきた。小学４年生でもなかなかのものである。また、個別指導で、「どうしてそこを選んだの？」と聞き役に徹してメモを取る。「いろんなことを考えてるんだね。」といってそのメモを渡せば、これは感想文の素材になる。本来、感動したことは話したくなる。この「いいとこ探し」をもとにすれば誰もが話しに参加できる。

実体験は、時間、場所、場面に制約される。しかし、現代は情報化の進展により、映像や書物から得る知識量は莫大となっている。ここで重要なのはメディアリテラシーである。これは多様な情報をもとに、考えるためのメディア読解力といえる。「実体験→映像視聴→読書」と想像、創造の世界は広がる。中でも読書からは、映像視聴の世界では設定されてしまっている場面を自分の頭で構築する想像力が養われる。私の考える読解力は、この想像・創造の世界の根底となるものである。この読書ノート「いいとこ探し」を活用し、読後の想像に発展していく実践につながれば幸いである。

“けん玉復興ツアー”に参加して

センター客員教授　寺西　康雄

「東日本大震災被災地の子どもたちに心の復興支援をしよう」と、2011年10月29日（土）～30日（日）、仙台市に全国各地から日本けん玉協会の会員有志約30名が集まった。私は日本けん玉協会富山支部の仲間とともに参加した。１日目、訪問先の学校の正面玄関で３・11当日の惨劇が甦った。「仙台市立東宮城野小学校」の看板の隣に、あたかも浜辺に打ち上げられた漂流物のように黒ずんだ一枚の板が壁に取り付けられていた。目をこらすと「仙台市立荒浜小学校」と墨筆されていた。海岸近くに建っていた荒浜小学校は津波によって壊滅的打撃を受け、東宮城野小学校の一角を間借りして学校生活を送っているとのことだった。２日目の訪問先の仙台市立岩切小学校では、３・11当日はもとより、その後の余震による被害が甚大で、校庭の石畳は液状化現象によって至る所に窪みや段差がみられた。

“けん玉復興ツアー”は、２日間とも、たくさんの子どもたちと大変楽しく過ごすことができた。

参加した子ども全員に新品のけん玉がプレゼントされた後、９種目の『けん玉入門級位技』から始まった。それらを１つクリアするごとに『級位認定表』にシールを貼っていき、すべての技をクリアできると『級位認定証』が授与された。引き続き、「ろうそく消し遊び」「どじょうすくい遊び」などの『けん玉ゲーム』に移った。楽しいゲームが終わると、「大皿」「ろうそく」「とめけん」などの『けん玉級位技』の練習に入った。最後に級位認定会が行われ、１人１人に級位認定証が渡された。

私はスタッフの一員として、低学年の子どもを対象に手取り足取り、温かい声かけやスキンシップを大切にしながら指導に当たった。はじめは表情が少し硬かった子どもたちも、時間の経過とともに表情が柔らかくなり、笑顔がはじけ、会話が弾み、心の絆が深まっていったように思う。

ところで、今回の“けん玉復興ツアー”への参加が最も多かったのは富山県の９名だった。その原動力となったのは高校生のＡくんであった。彼は、３年前、スクールカウンセラーの私と出会い、生まれて初めてけん玉を手にした。その後、めきめきと腕を上げ、現在、けん玉道二段である。彼は、「けん玉を通して自信や勇気をもつことができ、不登校を克服することができた。これからは、僕がけん玉を通して、いろんな人を元気にしてあげたい」との思いから「けん玉ボランティア活動」を行ってきた。昨夏には、被災地で避難所生活を続けられている人々にけん玉を通して元気を届けてきた。“けん玉復興ツアー”にもいち早く参加を決め、仲間に積極的に働き掛け、多数の参加を実現させた。

被災地の子どもたちと「けん玉」を通してふれあうことによって、笑顔を多少なりとも届けることができたのではないか……。いや、むしろ私たちの方こそ、被災地の子どもたちの笑顔から自信や勇気をもらって帰ってくることができのではないか……と。

附属幼稚園から

附属幼稚園　吉田　真寿美

今年度は「豊かな心をはぐくむ」を研究主題に掲げて３年目になり、「内面の高まりを支える」という副題で研究を進めてきました。子どもの内面が高まるような保育者の援助はどうあればよいのかを探ろうと、子どもの願いをしっかりととらえ、ねらいを明確にして保育実践に取り組み、その中で見せた子どもの姿から援助のあり方を検証してきました。子ども一人一人の細かな記録を基に、研究保育の機会に保育者同士が多面的な見方で保育カンファレンスを行うことを繰り返すうち、子どもの内面の高まりを支える援助に近づいている手応えを少しずつ感じ始めているところです。

今年度も大学の先生方や県内の保育所、幼稚園、小学校の先生方と一緒に研究を深めてきました。６月23日（金）の保育フォーラムには、東京成徳大学子ども学部　教授　神長美津子先生を講師にお招きし、県内外から250名余の方にご参会いただき、貴重なご意見をいただきました。

次年度は、子どもの内面を支えるには子どもが周りの環境をどうとらえているのかをさらに知る必要があること、私たちの援助の力量を高めたいという願いがさらに高まったことから、「豊かな心をはぐくむ」という研究主題を継続していくことにしました。過去３年間の研究の積み重ねを踏まえ、さらに一歩前進していきたいと考えています。

また、保育活動の中で今年度力を入れて取り組んだのは、親子栽培活動です。年少組親子はプランターで花を育て、年中組親子はプランターで野菜を育て、年長組親子は畑で野菜を育てました。親子で栽培活動に取り組む中で、親子の会話が増えたり、子どもの興味や生き物への思いが高まったりする成果が見られました。この成果も今後に引き継いでいきたいと考えています。

附属小学校から

附属小学校　草野　　剛

『よりよく思考する子どもが育つ授業の創造（４年度）』―思考の深まりと学ぶ喜び―

附属小学校では、平成20年度から「よりよく思考する子どもが育つ授業の創造」という研究主題を掲げて研究に取り組んでいます。平成23年度は、６月15日に研究３年度目（副題「思考の道筋を生かす比較の場」）の成果を発表する場として、春の研究発表会を開催しました。県内外の多くの先生方にご参加をいただくとともに、富山大学の先生方にも指導助言をいただきました。

その後、７月より、「思考の深まりと学ぶ喜び」という新しい副題のもと、教科の本質に向かって思考を深めていく子どもたちの思考の過程と、それによって学ぶ喜びを感じる場を教師がどのように設定していけばよいのかについて研究しております。その副題に沿って、10月から続いている校内での研究授業においても、大学との連携を密にし、事前、事後を問わず、学部の先生方にもたくさんのご指導をいただいております。

現在、校内研究授業も大詰めを迎え、今年度の成果を確認するべく、校内での授業検討に励んでおります。来年度は本研究主題の最終年度となります。５年間の研究の成果と課題を振り返り、翌平成25年春には出版を予定しております。今年度の成果と課題の上に立ち、研究の節目に向けて、より着実な研究実践を積み重ねていきたいと考えています。

附属中学校から

附属中学校　河原　弘幸

附属中学校では、「主体性の高まりをめざす課題学習」を研究主題に掲げ、今年度から副題を「課題学習における言語活動の明確化と充実」として、教育研究活動を進めています。

６月の教育研究協議会では、社会、理科、保健体育、技術・家庭において、公開授業や部会協議を行いました。また、全体講演会では、文部科学省初等中等教育局主任視学官の田中孝一先生をお招きし、「中学校の新教育課程における言語活動の充実　－義務教育の質の保証の視点から－」を演題に、お話をしていただきました。多数の方々に参加していただき、充実した研究協議会となりました。

昨年度までの４カ年は、副題を「学びあい、自ら学ぶ」とし研究を進めてきました。その成果は、言語活動に視点をあてることでさらに深化・発展し、研究主題の解明につながると考え、今年度からは言語活動をキーワードに研究を進めています。特に今年度は、授業の中ではどのような言語活動が行われ、それらが教科のねらいに迫るために、どのように効果的であったのかを明確にしてきました。今後は、言語活動の充実が、課題学習のもつどのような長所をさらに伸ばしていくのかなど、言語活動と課題学習の関連について研究を進めていきたいと考えています。

校内研修では、すべての教員が参観し、協議を行う、教科代表者授業を全教科で実施することができました。また、言語活動に関する県内外の研修報告を行うなどして、年間を通して充実した全体研修会を実施することができました。

平成 24 年度からは、教育研究協議会での授業公開が、これまでの半数教科から全教科に拡大されます。これまで以上に、生徒の成長に寄与できるような研究を進めていきたいと思います。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校　書川　隆行

特別支援学校では、研究主題を「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～キャリア発達を育む授業づくり～」と設定して２か年計画で取り組みます。今年度が、１年次です 。

本校におけるキャリア教育は、児童生徒の「望む姿」と周りの支援者から見る「望まれる姿」を考慮し、児童生徒が地域生活で主体的に活動する姿を目指します。「働く」・「暮らす」・「遊ぶ」の３つの柱を基に、個別の教育支援計画や個別の指導計画と関連させながら、「参加」を高める４つの力「実践力」「課題解決力」「協同力」「遂行力」（昨年度まで行ってきた授業づくりの研究の中で検討されてきた内容のキーワードを整理し、まとめたもの）を養い、キャリア発達を育むことが大切であると考えます。

今年度の研究では、キャリア教育のフィルターを通して、昨年度までの取組である、授業づくりの在り方、授業への「参加」を高めるための支援、指導目標の立案を見直し、各学部の授業研究を重ねることで、児童生徒のキャリア発達が育まれ、生活の質が向上し、将来の社会参加の可能性が広がる芽が見えてきました。

１年間の研究を終え、キャリア教育の視点の共通理解を図るための話し合いの中で、「授業の系統性」「ねらいの共通理解」「評価・評価基準」「学部間の連携・一貫性・つながり」などの新たなキーワードが見えてきました。今後の授業づくりでは、これらのキーワードについても検討していきたいと考えています。

本研究を進めるにあたっては、学部の川崎先生、阿部先生、水内先生に貴重な助言をいただくことで、研究を深めることができました。

＜高等部　チャレンジタイム・朝の会の授業から＞

報　告

第 15 回　発達と臨床の心理学講座

センター准教授　下田　芳幸

特別支援教育が正式に導入されて早４年。“発達の凸凹があるために、学習面や生活面、対人関係面で困難さを抱えやすい発達障がいの人たち”という点の現場での理解は進みつつあると思われますが、『彼らが対人関係のどんな側面に苦手さを抱えているのか』、そして『それに対してどんな支援の手だてが考えられるのか』については、まだまだ模索することも多いのが現状ではないでしょうか。

そこで今回は、発達障がいの、特に対人関係に焦点を当てて、特性の理解と支援の手立てを考える機会として、以下のような講座を開催しました。

平成 23 年８月６日（土）開催
福岡県発達障害者支援センターあおぞら

発達支援員・臨床心理士
松尾　伸一　先生

『発達障がいを持つ人の対人関係支援
～何につまずいていて、どう支援するのか～』

「具体的に支援する」方法を
具体的に解説される松尾先生

当日は、現場の先生方と、関心のある本学学生を含めて約 40 名にご参加いただきました。

ソーシャルストーリーズやコミック会話、感情を温度計で表現したり、領域別に５段階の表で考える方法など、先生が実際に現場で用いている方法を中心に、たくさんの関わり方を学ぶことができました。

特別扱いでなく特別支援である、という原点に立ち返ることのできる、大変有意義な会だったと、という感想を、多くの参加者からいただきました。松尾先生、ありがとうございました。

第 16 回　発達と臨床の心理学講座

センター准教授　石津　憲一郎

近年，情動調整の新しいスタイルが注目を受けている。情動は，人が生きていく上で欠かすことのできないものであるが，私たちを苦悩させるものでもある。近年，教員を取り巻く環境が変化し，教員の先進疾患による休職や退職がとても増えている。子どもたちと関わり，子どもの成長を促し，見守る教職員や大人のこころの健康はとても大きな課題といえる。

そこで，日本でも注目を集め始めたマインドフルネスの視点からのストレス低減法について，早稲田大学名誉教授の春木豊先生をお招きし，講義を行った。マインドフルネスは認知療法や徹底的行動主義に基づく弁証法的行動療法，ＡＣＴでも中心概念として取り上げられ，小中学校の先生のストレス低減にも，非常に有益であると考えられる。

平成 24 年 1 月 21 日　開催

講　師
早稲田大学名誉教授
春木　豊 先生

テーマ
『大人のための
マインドフルネス・ストレス低減法』

当日は，マインドフルネスの基本的な考え方に加え，上記の写真のように，これまで意識を巡らせることのなかったようなことに巡らせてみる練習や，筋弛緩を通じて，身体が心に与える作用についてお話をいただいた。多くの受講生が参加し，関心の大きさをうかがわせる内容だった。

報　告

Visual Triathlon 2011

センター教授　小川　　亮

平成23年11月18日（金）から同月20日（日）の３日間、Visual Triathlon 2011（以下VT2011）が富山大学人間発達科学部の３棟５階のアトリエで行われた。学部学生が主体的にその年の４月から計画を積み重ねて、実際の作品作成の機会であるVT2011につながるように、経験を積み、技能を磨いてきた到達点であった。

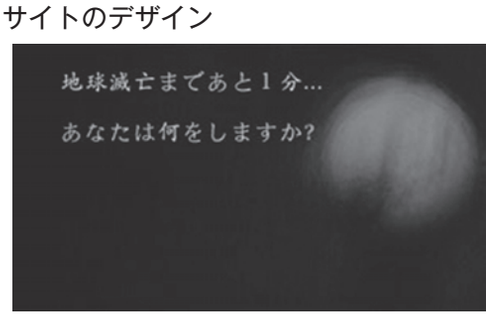
講師として、渥美聡子先生（アップル公認トレーナー：株式会社アクス・ケラー）と高信行秀先生（ターガミンデザインス）にご指導いただきました。

学生は、４つの班に分かれて、「ラスト１minute ～あなたはなにをする？」をテーマに、作品を企画し、素材を収集したり作成したりして、最終的にショートムービーを作成しました。作成の途中途中で中間報告を行いながら、制作行程をこなして行きました。作品作成した作品については以下のURLをご覧下さい。

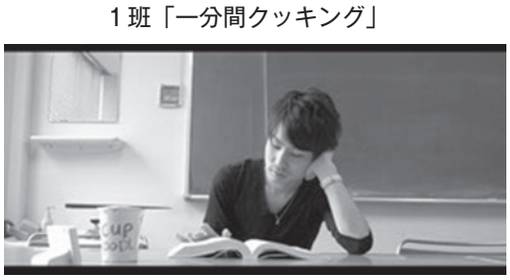
VT2011のWebサイト：http://mmcom.edu.u-toyama.ac.jp/vt/vt11/index.html

VT2011のWebサイトのデザイン

１班「一分間クッキング」



２班「地球最後の１分間」



３班「カップヌードル完成１分前」

４班「試験終了１分前」

第 79 回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター准教授　下田　芳幸

平成 23 年 9 月 16 日 (金)、横浜国立大学にて掲題会議が開催され、当センターからは、小川教授（兼センター長）と下田の 2 名が参加した。

午前中の総会では、前回議事の報告や事業計画（特にセンター協議会 Web サイトを通じて情報交換・活動成果の蓄積を図ること）が諮られ、承認された。

午後はまず全体で情報交換・意見交換がなされ、その中で、岡山大の教師教育開発センター改組後の状況報告や、和歌山大のセンター内に現場に似せて作られた教室にて授業実践の研修等を行っている取り組みが紹介された。その後 3 部門に分かれての会議が開かれ、報告者が参加した教育臨床部門では、教員の研究テーマの紹介と連携を図るための意見交換がなされた。

第 80 回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター教授兼センター長　小川　　亮

東京学芸大学において 2012 年 2 月 15 日に役員会が、同年 2 月 16 日に総会が開かれました。国立大学教育実践研究関連センター協議会会長の下村勉教授（三重大学）から開会の辞があり、続いて文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室から君塚剛氏から挨拶があった。また主催校あいさつが東京学芸大学学長の村松泰子からあった。

午前中は議事録確認、部門報告、2011 年度会計中間報告、2012 年度会計予算、2011 年度事業についての報告が行われた。

午後には、東日本大震災被害への各センターの取り組みについて、福島大学、宮城教育大学、岩手大学、東京学芸大学、奈良教育大学、和歌山大学から情報提供があった。15 時以降は、部門別に会議が行われた。

平成 23 年度日教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究教協議会報告

センター准教授　石津　憲一郎

H 23 年 10 月 14 日、上越教育大学にて掲題協議会が行われた。主な協議題を以下に報告する。

1）センターにおける地域連携の実施状況について

上越教育大学では教育実習プログラムをはじめ、フレンドシップ事業としてボランティアや体験学習への学生の派遣、教育委員会、ＮＰＯのような各教育機関との連携を行っている。福井大ではＳＮＳを用いた試みがなされている。金沢大学では、センターは学類の教員と地域とをつなげる窓口役や、スクールサポーティングを行っている。信州大学では、長野市 10 年経験者の研修や、臨床心理士養成の指定校でもあるため、心理教育相談室と地域連携を行っていることが挙げられた。富山大学では学部で行われる様々な活動にセンターがコミットしており、主に教員養成と現職教員の研修、学生の派遣が行われている。

2）教職実践演習の実施について

各大学の取り組みとして、信州大や金沢大のように、センター独自ではそれほどコミットしていないが、履修カルテシステムや授業での支援を行っている大学と、上越教育大学のようにすでに教職実践演習の試行を行っている大学があった。富山大学では、「４年間の学びのステップ」や「履修カルテ」を用いた実践を行っている。福井大学では、教員養成スタンダードを作成し、すでに現４年生から試行をスタートさせている。

平成 23 年度におけるセンターの相談件数（延べ回数）

	面接による相談		電話・メール相談	合　計
	学内者	学外者		
本人のみ	０	１０２	２２５	３２７
保護者のみ	２	４０	９	５１
学校関係者のみ	０	４	２５	２９
保護者と本人など複数	０	４	０	４
教師個人	０	２	０	２
合　　計	２	１５２	２５９	４１３

編 集 後 記

今シーズンは近年まれにみる豪雪だったようですが、ようやく雪も解け、薄暮に春の匂いを感じる頃となりました。センターニュースの 28 号をお届けいたします。

今年度は東日本大震災関連のニュースが多く、教育臨床研究部門の教員２名も、学校支援で現地へ出向きました。しかし、我々の力不足もさることながら、あまりに重たい現実に、いまだに多くを言葉にできずにおります。現地の着実な復興を心より祈念いたします。

また今回の震災では、学校における教師の役割について、様々に考えさせられることとなりました。何を､そしてどこまでを求めるのか。世の中の議論の行方を見定めつつ､実践センターとしてお手伝いできる部分はいったい何かを考えることも、これからの課題の一つと感じております。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（下田　芳幸）

印　　刷　　平成 24 年３月 26 日
発　　行　　平成 24 年３月 26 日
編集発行　　富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者　小川　　亮
〒 930-8555　富山市五福３１９０
電　話　０７６－４４５－６３８０